

# 広島・長崎へ行って

第二中学校 2年

藤嶋 真理恵さん

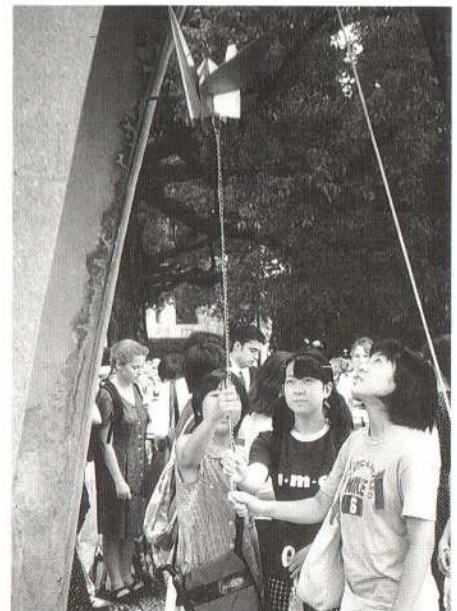


過去に深い心の傷も、体の傷も受けたことがなく、過去におそろしい出来事に出会ったこともない。そんな私が、広島・長崎でもとても貴重な体験をしてきた。その心の中に残ったことを、今から発表しようと思う。

まず最初にショックを受けたのが長崎の原爆資料館だった。きれいなものは一つもなく、全て私と同じ人間が行った戦争のことや、それによって受けた傷が写真や映像となって残っていた。

八月六日の広島で見てきた原爆資料館も同じだった。私も含めて、館内の人々は決して明るいとさええない表情で資料館の中の「原爆」を見つめていた。止まった時計、

ボロボロの衣服、ゆがんだガラス、原爆で受けた体の傷の写真、中には、目をそむけたくなるような資料もあった。しかしそれは、同じ人間同士の争いの結果を描いた資料であり、決して忘れてはならない過去だった。同じく広島の前爆ドームを見たとき、その痛々しさに、思わず悲しくなってしまう。このドームの近くでも、たくさんの人々が逃げまどい、苦しみの叫び声をあげていたのかと思うと、ドームをバックに記念撮影などしなくなかったし、写真をとらずに自分の目と心の中に焼きつけておきたいと思った。原爆が落ちたということは過去のことではあるが、ドームや資料館内で見たことは本



当にショックのため息がこぼれた。平和、平和と言われている日本だが、本当に今は平和なのだろうか。正直言って、私の心の中にはわだかまりが残ってしょうがない。たしかに今、日本は戦争の状態ではないが、世界ではまだまだ大小の戦争が起きている。今も過去の戦争でできた体や心の傷が、残っている人はたくさんいるはずだ。

戦争や原爆の悲劇は「過ぎてしまったこと」ではなく、「まだ続いている問題」だと思う。私が見てきた悲劇は一部であり、大部分は数多くの人々の心の中にあるような気がする。そして、今の私ができることは、「悲劇はくり返さない、くり返してはいけない」という強い意志をもち続けることだと、思う。

その人たちの傷が今なお、いやされていらないとしたら、それは「平和」とは言えないのではないか。戦争や原爆によって受けた傷が残っているのは、資料館の中だけではなく、その時代を生き、今も生きていく人たちの中にもあるのではないかと

